

佳作

ありがとう

鹿児島県 志學館高等部二年 金倉 輪

私の母は太陽のような人だ。いつも陽気で子供達を笑わせてくれる、家族に必要不可欠な人。もちろん、太陽が隠れて雷が落ちることもある。母が本気で怒ると、震えるほど怖い。しかし、母は私を叱る時、生きる上で大切な事を必ず教えてくれる。嫌われ役を買ってでも、私を守ってくれる強い母は私の憧れである。反対に、父は月のような人だ。四姉妹と母に囲まれ、家族の中では最も控えめ。妹達の押しに負け、よく外に連れ出されたり、一緒に寝て本を読んであげている姿を見かける。お寺の住職である父には、挨拶をきちんとするよう教わった。

「食前、食後にはきちんと手を合わせて、いただきますとごちそうさまでした。家族にはおはよう、おやすみをきちんと伝える。近所の方々には聞こえるように挨拶をしてね。」

一見、当たり前のようにではあるが、生きる上で礼儀として必要なマナーを、私が幼い頃から身に付けさせてくれた。

けをしてくれた。私は、母に申し訳なくて仕方が無かった。高校二年生になって気持ちを入れ替えて頑張ると気合いを入れ直したが、欠席の頻度は上がる一方だった。テストを受ける時、ちゃんと出来ない自分が嫌で、怖くて手が震えるようになった。前のように、上手くこなせていた記憶が抜けず、どうしても今の自分を受け入れられなかった。二日連続休んでしまった時、母から、

「一回帰っておいで。」

と言われて家に帰ることになった。一週間ご飯もまともに食わず、ほとんど寝てばかりいた。自分は出来損ないだ、失敗作だ、そればかり考えてしまうようになった。あんなに母に怒られるのが嫌いだったのに、今では、なぜこんな自分を怒らないんだろうとさえ思っていた。そんな時、母が部屋に入って言葉をかけてくれた。

「休む選択は良かったと思うよ。多分、ストレスが溜まってんだらうね。困ったり、迷ったり、泣いたりしたいときは、言っていんだよ。一緒に考えよう。もう少し肩の力抜いて過ごそう。」

思わず泣いてしまった私を見て、母も泣いていた。久しぶりにリビングに来た私を見つけた父は、私の好きなお菓子を差し出して、

「お腹空いてたら食べな。」

と笑顔で声をかけてくれた。心配症な父の優しさにまた涙が出そうだった。

その二人の間に、私は次女として生まれた。生まれつきの病気があり、二回の手術を経験したものの、無事に小学校へ上がり、元気に学校生活を送った。人数が少ない小中一貫校であったため、様々な学年の人と話す機会があり、人と話すことが得意分野となった。学校の生徒会長を務め、部活では副キャプテンとしてキャプテンを支えた。私は、「ちゃんとしている自分」が好きだった。毎回テストで良い成績を取る自分、生徒会長としての職務をこなす自分、立てた計画通り物事を進められる自分。そのため、高校でもきつと上手くいく、そう信じ切っていた。

出だしは順調だったと思う。多少の人見知りはあったものの、仲良くなった友達とはたくさん話も出来た。テストも中学の頃よりは難しくなっていたが、自分の納得のいく点数は取れていたと思う。このまま頑張れるといいなと、前向きな気持ちだった。しかし、高校一年生の二期期辺りから、自分に異変が見られるようになった。眠りが浅くなり、夜中に何回も起きるようになった。そのせいで体調が悪くなり、遅刻や欠席が目立ち始めた。それに伴って、授業の理解度や成績も徐々に下がってきた。焦る気持ちはあるものの、身体は思うように動かず、学校に行きづらくなった。寮生活をする私に、母が電話をかけてきた。母は、学校に行けないことや、自分の成績のことに怒ることなく、私の体調やメンタルの心配だ

私は「ちゃんと」している自分が好きだった。でも、人にはどうしても頑張れないときだってある。それを自分で受け入れてあげる。その大切さに気付かせてくれたのは、両親の優しさだった。今の私は、まだ不安も多く、学校を休むことだってある。でも、両親のおかげで私には、ある目標が出来た。それは、誰かにとって必要な人になる、ということだ。「輪」という私の名前には、大切な思いが込められている。私は生まれてすぐ手術を受け、多くの人に支えられ命を繋いできた。仏教は全ての命が繋がっていて、お互いが支え合いながら生かし生かされる命しながら存在している。私達一人一人もまた、そういう命の輪の中で生かされていることを忘れないようにという願いが込められているそうだ。私は、この名前にふさわしい人間になりたい。困って助けを求めている誰かのために必死になって動ける人間になりたい。私を生んでくれて、最強の味方でいてくれる両親のように。